

フランス歌曲と日本歌曲の歌姫 荻野綾子と東京高等音楽学院

(現在:国立音楽大学)

荻野綾子(1898.11.2-1944.10.12)

染谷 周子

作曲家連盟の資料を調査している時、雑誌『音楽評論』で見つけた記事は、若い作曲家を支援する内容なので印象が深かった。

「御知らせ 荻野綾子氏御寄贈の歌謡曲用五線紙が出来上がって本郷曙町十一曙楽荘に保管して御座いますから御立寄御持ち下さい。(庶務部)」「音楽評論」1号(1933.4 p.86)

荻野綾子は1930年(昭和5)連盟の第1回作品発表会に出演している。その後、2度目のフランス留学、1932年(昭和7)に帰国する。連盟には客員として加入し、連盟員の作品を多く演奏会で取り上げる。

最近、国立音楽大学創立80周年事業で『演奏の80年史 東京高等音楽学院・国立音楽学校時代1926-1950』の資料集を作成した際に、再び荻野綾子と再会。「東京高等音楽学院第4回学友会演奏会」(1928年7月7日 国立野外奏楽堂 開演:午後6時)に荻野綾子が出演していた。

- ソプラノ独唱 客演荻野綾子女士 伴奏 ショルツ教授
- (イ) 戦地を憶う(デュパルク)
- (ロ) ノクターン(ショルツ)
- (ハ) ダルターニユの歌(ラロ)

どこの場所に行っても、なぜこの人に会うのだろうと気になる人がいる。資料の調査をしていて出会った「声楽家・荻野綾子」は私にとって、気になる人である。

最初は10年前、現在の「日本現代音楽協会」の前身である「新興

- (ニ) (ホ) マンドリン、ロマンズ(ドビュシー)
- (ヘ) サラマンクの青年(ルーセル)

学友会演奏会は学院の生徒が主催し、生徒の演奏発表が主である。ドイツ音楽が中心の学院の演奏会でフランス歌曲の客演は珍しい。学院から出演を依頼された頃の荻野綾子は、最初のフランス留学から帰国したばかりであった。この学友会演奏会はこれまでの演奏会と大きく異なっていた。会場はいつもの学院講堂ではなく野外奏楽堂、昼ではなく夜の開演であること、またプログラムに呉服店の広告があるなど。荻野綾子の出演がこの異例の演奏会となったのであろうかなどと想像してみる。まさか、荻野綾子と東京高等音楽学院と関連があるうとは、資料調査をしていての嬉しい発見である。



【東京高等音楽学院第四回学友会演奏会】
1928.7.7 プログラム

荻野綾子●おぎのあや

1898年(明治31) 福岡に生まれ、

1919年(大正8) 東京音楽学校本科声乐科を卒業後、深尾須磨子とともに1925年(大正14) から3年間フランスに留学。声楽をクロワザ(Claire Croiza 1882-1940) に師事。1930年(昭和5) から再度深尾須磨子とフランスへ。帰国後、1933年(昭和8) より東京音楽学校に着任したが、同校教師太田太郎との恋愛がもとで翌年7月二人とも辞職。その後大田太郎と結婚するが、この結婚に関して「荻野綾子結婚事件」として『音楽新聞』(昭和9年(1934)・請求記号●MF00195) にセンセーショナルに書かれる。1937年(昭和12) 文部省嘱託の夫とともに渡欧。パリで開催された国際音楽祭に日本人として初入賞した外山道子の作品《やまとのこえ》に出演。帰国後、後人の指導を行ない、フランス歌曲の紹介及び日本歌曲を歌い続ける。1944年(昭和19) 10月45歳で死去。翌年8月夫の太田太郎も死去する。

参考資料

- ◆ 金原礼子・フランス歌曲演奏史 荻野綾子について『音楽の世界』42巻9号(2003.11)・継続連載中(請求記号●964)
- ◆ 『マキエメンタリー』新興作曲家連盟 戦前の作曲家たち1930-1940』国立音楽大学附属図書館 1999(請求記号●63-8-3)
- ◆ 『演奏の80年史 東京高等音楽学院、国立音楽学校時代 1926-1950』国立音楽大学 2006(請求記号●110-790)
- ◆ 『西条八十全集』 荻野綾子の独唱・山田耕作『青い上衣』橋本國彦『大と雲』(請求記号●KD20429)

● そめや かねこ 2年間関わった「国立音楽大学演奏の80年史」の仕事が終了。しかし、いまだに放心状態が続いています。